

イオカステはアポロンを侮辱したか

その他のタイトル	Did Jocasta scorn Apollo?
著者	平野 智晴
雑誌名	東京大学西洋古典学研究室紀要
巻	8
ページ	1-28
発行年	2013-12
URL	http://doi.org/10.15083/00078895

ὦ θεῶν μαντεύματα, ἴν' ἔστέ:
イオカステーはアポッローンを侮辱したか

平野智晴

I

S. *OT* において、アポッローンよりもたらされた三つの神託は、陰に陽に立ち現れて悲劇全体を方向付ける重要な動機となっている。すなわち、「疫病を祓うため先王ラーイオスの殺害者を探し追放するか血で償わせよ」(95-98, 100-101, 103-104, 106-107)、「ラーイオスは自らの子によって殺される運命にある」(713-714)、「オイディプースは母と交わり見るに耐えない子を生し父を殺す運命にある」(791-793)、これらを巡って登場人物たちがそれぞれの立場から論争を繰り広げ、徐々に、「オイディプースとは何者か」という重要な謎が解き明かされてゆくのである。

ところで、不法で穢れた身であることをやがて暴露されることになるオイディプースとイオカステーは常にアポッローンの神託に翻弄され続ける存在であるが、とりわけこれらに一貫して不信の念を表明し続けるイオカステーについて、その対象が神託のみならずアポッローンにまで及ぶかどうか、研究者の間で解釈が分かれている。本論では、この問題について考察し、イオカステーが不信の念を抱いているのは死すべき人間たる神官がもたらす神託（そして神託をもたらした神官）のみで、不死なる神アポッローンに対する敬神の念に揺らぎは

ないこと、しかしながら状況が緊迫して言葉が激して来るに連れて、台詞上神託と神の区別が曖昧になり知らずしてアポッローンを侮辱することとなり、アイロニックに自らが不敬で穢れていることを効果的に観衆／読者に示していることを論証する*1 *2 *3。

II

第三エペイソディオオン冒頭において、イオカステーは祈願の小枝と香を手手にリュケイオス・アポッローンの祭壇へ現れ、心を取り乱しているオイディプースの様子を訴え、穢れを祓うための救いを与えるよう祈願する。この祭壇は悲劇の冒頭で神官たちが嘆願のために

*1 本論で扱う問題については多数の報告が成されているが、主な先行研究として、R. C. Jebb ed., *Sophocles: Plays; Oedipus Tyrannus* (Cambridge 1893. Repr. London 2004) (以下 Jebb と略記) ; B. M. W. Knox, *Oedipus at Thebes: Sophocles' Tragic Hero and His Time* (New Heaven and London 1985) 159-184 (以下 Knox と略記) ; R. P. Winnington-Ingram, 'The fall of Oedipus' in *Sophocles: An Interpretation* (Cambridge 1980) 179-204 (以下 Winnington-Ingram と略記) ; C. Carey, 'The Second Stasimon of Sophocles' *Oedipus Tyrannus*' *JHS* 106 (1986) 175-179 (以下 Carey と略記) を中心に扱うこととする。なお、本論において、作品解釈に大きな影響を及ぼすような異読の問題は扱わないので (例えば ὕβρις φυτεύει τύραννον (873) のような)、原文テキストは一律 H. Lloyd-Jones and N. G. Wilson ed., *Sophoclis Fabulae* (Oxford 1990) から引用することとし、必要に応じて拙訳を付した。

*2 本論では、ドラマティック・アイロニーを、「観衆／読者が、登場人物の言動について、登場人物にとっての論理のみならず、それを越えて背景となる神話やこの後の展開までも同時に見通すことができる現象」と定める。登場人物はそれぞれの理解に限定されているがゆえに、彼らが舞台上で何らか言動するとき、彼ら自身にとっては表の意味だけが意識されているにもかかわらず、観衆／読者にとっては表裏両様の意味に聞き取れる、という認知の落差が生ずるのである。いわゆるソフォクレスのアイロニーについては、cf. L. Campbell. ed., *Sophocles: Plays and Fragments Vol. I* (Oxford 1876) 126-133、ギリシア悲劇一般におけるアイロニーについては、cf. R. B. Rutherford, 'The irony of Greek tragedy' in *Greek Tragic Style* (Cambridge 2012) 323-364.

*3 本論では、「観衆／読者」を、当該悲劇が成立した時代において、上演されたものを観た者あるいは出版されたものを読んだ者、と定める。

座っていた祭壇であり*4、しかもアポローンの祭壇である。この事実は、劇の冒頭でクレオンが持ち帰った神託に応じてオイディプースがかけた呪い (246-251)、そしてかつてラーイオスに下された神託 (711-714)、オイディプースに下された神託 (787-793)、劇の最後に目を潰して登場したオイディプースの、この苦しみを成就させたのはアポローンだ、という叫び (1329-1330) を併せて考えれば、劇の骨格を成す重要な舞台設定として注視してよいであろう。

ところで、コリントスの使者によってオイディプースが実父と考え殺すことを恐れていたポリュボスの死が伝えられると、イオカステの態度は急変する。彼女は、ὦ θεῶν μαντεύματα, / ἴν' ἔστέ. (946-947) と勝ち誇ったように言い捨て、館から出てきたオイディプースに対しても、ἄκουε τάνδρὸς τοῦδε, καὶ σκόπει κλύων / τὰ σέμν' ἴν' ἤκει τοῦ θεοῦ μαντεύματα (952-953) と、その調子を崩さない。イオカステのアポローンの祭壇への嘆願と、その後の露骨に侮辱的な言動の間の隔たりは、一見したところ理解し難い。

まず、この問題に関わる箇所を全て列挙して、全体像を把握しよう。第二スタシモンの前後にそれぞれ二箇所ずつ計四箇所が挙げられるが、そのうち第二スタシモンに後続する二箇所は既に上で言及されている。第二スタシモンに先行する二箇所の内ひとつは、テイレシアースにラーイオス殺害者だと言われ憤慨するオイディプースをなだめるために、人間は予言の技術など持っていない事を示そうと、ラーイオスに下された神託が成就しなかったことを例に挙げた際の χρῆσιμος γὰρ ἦλθε Λαίῳ ποτ', οὐκ ἐρῶ / Φοίβου γ' ἅπ' αὐτοῦ, τῶν δ' ὑπηρετῶν ἄπο, (711-712) という台詞、もうひとつは、このイオカステの一連の台詞を聞きラーイオス殺害の疑いをさらに深め恐れ慄くオイディプースを再度説得しよう、この神託が成就しなかったことを強調し繰り返した際の εἰ δ' οὖν τι κάκτροέποιτο

*4 Knox 175-176.

τοῦ πρόσθεν λόγου, / οὔτοι ποτ', ὦναξ, τόν γε Λαΐου φόνον /
φανεῖ δικαίως ὀρθόν, ὄν γε Λοξίας / διεῖπε χρῆναι παιδὸς ἐξ
ἐμοῦ θανεῖν. (851-854) という台詞である。最初の説得の試みでは
イオカステーはアポッローンとアポッローンの神官を慎重に区別して
いるが、第二の説得の試みでは Λοξίας διεῖπε と、あたかもアポッ
ローン自身が言及したかのように発言している。

Jebb は、イオカステーの μάθ' οὔνεκ' ἔστι σοι / βρότειον οὐδὲν
μαντικῆς ἔχον τέχνης. (708-709) に対する註釈で、第一スタシモン
ἀλλ' ὁ μὲν οὖν Ζεὺς ὁ τ' Ἀπόλλων / ξυνετοὶ καὶ τὰ βροτῶν /
εἰδότες· ἀνδρῶν δ' ὅτι μάντις / πλέον ἢ ἡ γῶ φέρεται, / κρίσις
οὐκ ἔστιν ἀληθῆς (498-501) というコロスによる歌を引用し、神々
は予知の能力があるがその能力を人間には与えていない、それはデル
フォイの神官のような聖職者にすらもそうである、と解釈し、また、ク
レオーンと激しい口論となったオイディプースを諭すために言った台
詞 ὦ πρὸς θεῶν πίστευσον, Οἰδίπους, τάδε, / μάλιστα μὲν τόνδ'
ὄρκον αἰδεσθεὶς θεῶν, / ἔπειτα κάμῃ τοῦσδε θ' οἱ πάρεισί σοι.
(646-648) を引用し、イオカステーは神々を敬っている、とする。また
彼は続ける、911 以下に明らかなように、イオカステーが気にかけて
いるのは神々、特にアポッローンである、しかし、デルフォイの命令
によって彼女の最初の子供を犠牲に捧げたにもかかわらず彼の夫ラー
イオスを救うことができなかった、という彼女の人生に降りかかった
衝撃は、それが神官であろうが予言者であろうが、神々の予見の技術
に、人間などあずかることができな、という深い不信の念を植え付
けた、と。イオカステーは未だ神々の分別を弁えた万能性を信じてい
るが、神々の命令の、いかなる死すべき人間の解釈者をも受け容れる
つもりがない。ゆえに、Jebb は、彼女の第一の説得の試み 711-712 を
踏まえて、上に挙げたイオカステーの 946-947、952-953 の台詞につ
いて、θεῶν μαντεύματα は、神々から伝えられたと主張された神託

であると解釈するのである*5。

Knox は、これに対して、οὐκ ἐρῶ / Φοίβου γ' ἄπ' αὐτοῦ と Λοξίας / διείπε を区別しようとする。第一の説得の試みの際、イオカステは κἀνταῦθ' Ἀπόλλων οὔτ' ... ἤγνυσεν (720) と述べており、アポッロンの関与を明確に否定している。しかし、この説得の試みで、オイディプスはさらにラーイオス殺害に自分が関与したのではないかという疑いを深めてしまう。彼は、καί μ' ὁ Φοῖβος ὦν μὲν ἰκόμην / ἄτιμον ἐξέπεμψεν, ἄλλα δ' ἀθλίω / καὶ δεινὰ καὶ δύστηνα προῦφάνη λέγων (788-790) と、Ἄπολλῶνι 自身が自分に下した神託について告白する。このアポッロンへの直接の言及がイオカステの二番目の説得の試みに影響を与える。すなわち、もし彼女がオイディプスに対して何らかの慰めになろうと思うなら、彼女は自分の非難の対象をオイディプス自身がフォイボスの言葉としているものにまで拡張なくてはならない、そのため彼女は第二の説得の試みで Λοξίας διείπε と言ったのだ、と Knox は解釈するのである*6。彼の解釈は、彼女が言及する対象が「アポッロンの神官」から「アポッロン」へ移行している、とする点において Jebb と明らかに対立しており、実際反論を唱えている*7。Knox は、イオカステが ἄγχιστος γὰρ εἶ (919) という理由を嘆願のなかで口にするのは無神経であるとし、彼女の敬神の念の脆さを強調して伏線を張りつつ、コリントスからの使者の知らせに際して、イオカステの神に対する信頼の念が引いてしまった、と解釈するのであり*8、彼からすれば、911 以下において、イオカステはアポッロンへ嘆願していながらその後すぐにアポッロンの神託を侮辱する、という、まさに首尾一貫性を欠いた相反する言動を行っていることになるのである。

*5 Jebb xxviii-xxix, 98-99 ad 708.

*6 Knox 171-173.

*7 ibid. 260 n. 44.

*8 ibid. 176.

Winnington-Ingram も、第二の説得の試みに言及した際、同様に Jebb の解釈を批判し、イオカステの名誉を救うために些細なことを考え過ぎる必要はない、と牽制する*9。そして、第三エペイソディオンにおける神託への侮辱に対しても同様の立場を繰り返す*10。また、彼は、第二スタシモン最後のスタンザで表明されるコロスの恐れ (898-910) をイオカステの不敬の反映と捉え、彼らはアポッローンと彼を司る神官の間の仮定上の区別には興味がない、問題になっているのは全ての神託を出す社、特にアポッローンの社の信用である、そしてこれは τὰ θεῖα (910) を巻き込みゼウスの関心事でなくてはならない、と論ずるのである*11。

Carey も、Winnington-Ingram と同様に、「イオカステの懐疑」について、多くのシーンでアポッローンは明確に除外されている (708f., 711f.) か除外されていると考えられる (τοιαῦτα φῆμαι μαντικαὶ διώρισαν, / ὧν ἐντρέπου σὺ μηδέν· ὧν γὰρ ἄν θεὸς / χρεῖαν ἐρευνᾷ ῥαδίως αὐτὸς φανεῖ. (723-725)) が、853 において彼女は実際に成就しなかった神託をアポッローン自身に帰している、と論じている。そして、Winnington-Ingram に従い、そのアポッローン自身に向けられた懐疑は、第二スタシモンの最終スタンザで表明されているコロス自身の態度と非常に類似したものと考えるのである*12。

Jebb の解釈は、このように、後続の研究者によってそれぞれの立場から批判されている。Knox は、オイディプースの不安がティレシアースに対するものからアポッローンへのものへ移行していくことと軌を一にして、イオカステの台詞もまた οὐκ ἐρῶ Φοίβου γ' ἀπ' αὐτοῦ, τῶν δ' ὑπηρετῶν ἄπο から Λοξίας διεῖπε へと移行していくことを見逃さない。Winnington-Ingram もこの差異を明確に認めつ

*9 Winnington-Ingram 181.

*10 ibid. 182.

*11 ibid. 181.

*12 Carey 175.

つ、しかし、この差異自体はテイレシアースの予言から全ての社から出される予言へ敷衍されている事実の前には無視され得るものであり、Jebb の一連の解釈自体が、イオカステの名譽を救うための、無意味なものであるとする。Carey も基本的にこの理解を踏襲している。三人にとって、神託への批判も神への批判も同じことであって、イオカステは神託のみならずアポローンに対しても侮辱的な感情を示しているとして何ら問題はないということになる。

これから、本論では、彼らの主張を批判的に論じ、新しい知見を得ようとするのであるが、そのために、私は、第三エペイソディオンの冒頭におけるイオカステの台詞に立ち戻って、今一度、解釈の可能性を探り整理することから始めたい。

III

Io.

χώρας ἄνακτες, δόξα μοι παρεστάθη
 ναοὺς ἰκέσθαι δαιμόνων, τάδ' ἐν χεροῖν
 στέφη λαβούση κάπιθυμιάματα.
 ὑψοῦ γὰρ αἴρει θυμὸν Οἰδίπους ἄγαν
 λύπαισι παντοίαισιν· οὐδ' ὅποι' ἀνήρ
 ἔννουσ τὰ καινὰ τοῖς πάλαι τεκμαίρεται,
 ἀλλ' ἔστι τοῦ λέγοντος, ἦν φόβους λέγῃ·
 ὅτ' οὖν παραινοῦσ' οὐδὲν ἐς πλέον ποῶ,
 πρὸς σ', ὦ Λύκει' Ἄπολλον, ἄγχιστος γὰρ εἶ,
 ἰκέτις ἀφίγμαι τοῖσδε σὺν κατεύγμασιν,
 ὅπως λύσιν τιν' ἡμῖν εὐαγῆ πρόης·
 ὡς νῦν ὀκνοῦμεν πάντες ἐκπεπληγμένον
 κείνον βλέποντες ὡς κυβερνήτην νεώς.

(911-923)

(イオカステの台詞)

この国を治める方々、ある考えが私に思い至りました、
神々の祭壇へお参りするという、両の手にこの
嘆願の小枝と供物の香を携えた私に。

というのも、心を昂らせること、オイディプスは、度を超しておいでだから
です、

ありとあらゆるご心痛によって、彼は、思慮ある人間が
新たな事態を古き経験によって判断するようにはなく、
恐ろしいことを言う者があれば、言う者の言いなりになっておいでです。

お諭しても、私は事態を好転させることができませんので、

あなたに、リュケイオス・アポッローン様、あなたは最も近くにおられますので、
私は、嘆願者として参りました、この嘆願の微と共に、
私たちに、穢れからの解放をお与え下さいますように。

というのも、今や、私たちは皆、怯え慄いているからです、あの方が、
恐怖に打たれているのを見ていると、まるで船の舵取りがそうであるかのようで。

上記の台詞において、これまで、次に示す二つが解釈の分かれる箇所として問題とされてきた。

一つ目は $\acute{\alpha}\gamma\chi\iota\sigma\tau\omicron\varsigma \gamma\acute{\alpha}\rho \epsilon\acute{\iota}$ (919) であり、「あなたの祭壇が宮殿から最も近いので」と解釈することが可能であるため、Knox がそこに不敬の現れを読み取ったことは既に触れた*13。しかし、Dawe が論ずるように、それだけでなく、アポッローンが「困難において今まさに援けになりうる」、あるいは「この家族の問題に下された神託に最も緊密な関係がある」と解釈することも可能である*14。

二つ目は、 $\lambda\acute{\upsilon}\sigma\iota\nu \dots \epsilon\upsilon\acute{\alpha}\gamma\eta$ (921) であり、「テーバイにもたらされた疫病たる穢れからの解放」と解釈することも可能であるが、同時に「神託の成就が二人にもたらすことになる穢れからの浄め」と解釈することも可能である*15。

*13 cf. p. 5

*14 R. D. Dawe ed., *Sophocles Oedipus Rex* (Cambridge 2006) 153 ad 919.

*15 これを「オイディプス一人に関係付けられる何らかの穢れ（からの解放）」とは考えられないであろう (cf. J. C. Kamerbeek, *The Plays of Sophocles Part IV, The Oedipus Tyrannus* (Leiden 1953) 184 ad 921)。ラーイオス殺害の事実が確定していない現時点において祓うべき穢れはまだ存在しないし、そもそもイオカステは $\delta\pi\omega\varsigma \dots \acute{\eta}\mu\acute{\iota}\nu \dots \pi\acute{o}\rho\eta\varsigma$ と、自らも含めて複数の形で述べているからで

私は、これらに加えて新たに指摘すべき三つ目の問題として、*παραινουῶς* οὐδὲν ἐς πλέον ποῶ (918) を挙げたい。彼女がアポローンへの嘆願のなかで先の言動についての記憶を辿るにあたって、「論したが上手くいかなかった」と言うこの台詞が、707-862 の下りを指していることは明らかである。ここで、もし、*παραινουῶσα* がその内容としていることを「人間がもたらした神託があてにならないこと」と取り、*Λοξίας διεῖπε* (853-854) を οὐκ ἐρῶ / Φοίβου γ' ἄπ' αὐτοῦ, τῶν δ' ὑπηρετῶν ἅπο (711-712) の事実上の言い換えになっている、と考えれば^{*16}、「死すべき人間の作り事に過ぎない神

ある（彼女が自分も穢れていることに気付くのはもっと後のことである（通例、1025ff.）。むしろ、ここでは、すぐ後に、彼女が彼を「船の舵取り」に喩えていることに注意したい（923）。王が自らを直接舵取りの一人に喩えたり（*A. Theb.* 2）、あるいは国家を船に喩えることで自らを舵取りの一人であることを仄めかす場合（*S. Ant.* 162-163）、国家はあたかも嵐の中を漂流する船のようである／あったと表現されているのであり、すなわち、国家がまさに国家的な危機に直面している／いた、ということが意味されているのである。そして、「国家たる船において、王たる船の舵取りが恐怖に捉えられていて、私たちは不安である」、と言われる時、ただ中にあると想定される国家的な危機たる嵐は、ここでは、テーバイに蔓延する疫病に他ならない。ゆえに、ここでは、疫病の問題が改めて持ち出されることで、観衆／読者のためにテーバイの置かれている状況の再確認が図られた、と考えるべきである。

^{*16} このような言い換えが成立している箇所は他にも見られる。第三エペイソディオンの冒頭、イオカステが嘆願を終えると、コリントスの使者がやって来てポリュボスの死が報告される。イオカステはオイディプースを呼びに侍女をやり、館から出てきた彼に次のように言う： ἄκουε τὰνδρὸς τοῦδε, καὶ σκόπει κλύων / τὰ σέμν' ἴν' ἦκει τοῦ θεοῦ μαντεύματα. (この者の言うことをお聴きになって下さい、そして、かの神の畏るべき／神託が何処へ行つたか、聞いて、御判断なさって下さい。(952-953))、事情を聞いたオイディプースは次のように安堵と喜びの声を上げる： φεῦ φεῦ, τί δῆτ' ἄν, ὦ γύναι, σκοποῖτό τις / τὴν Πυθόμαντιν ἐστίαν, ἢ τοὺς ἄνω / κλάζοντας ὄρνεις, ... (ああ、ああ、一体全体何故、おお妻よ、／ピュートーの予言者の籠や、あるいは空に啼く鳥に、／伺いを立てる必要などあろうか..... (964-966))、そしてイオカステは答える： οὐκ οὐκ ἐγὼ σοι ταῦτα προῦλεγον πάλαι; (私は、あなたに、このことを前から申しませんでしたか? (973))、ポリュボスの死に安堵し喜ぶ一方まだ生きている母親が恐ろしいと言うオイディプースは、使者に、次のように事情を説明する： θεήλατον μάντευμα δεῖνόν, ὦ ξένε. ((私が恐れているのは) 神から伝えられた恐ろしい

託と称されているものについて、オイディプスはあまりにも心を悩ませ我を失っています。そのようなものに心を煩わせる必要など全くない、といくら諭しても聞き入れてもらえないのです」と言っている

と解釈できるであろう。しかし、もし「アポッローンは我が子とラーイオスの死の定めについて言い誤った」事実を以て諭したという意味であるとすれば、「あなたからの定めなどあてにならないと諭したにも関わらず聞き入れてもらえなかったのです」、つまり「あの時、確かに私はアポッローン様を非難いたしました、オイディプスの不安を払って差し上げられなかった今となつては、あなたにお縋りするしかないのです」といった意味のことを言っていることになるであろう^{*17}。

一体、イオカステは、この嘆願で何を言おうとしているのであろう。ここで押さえておくべきは、彼女は上記の台詞を述べるにあたり、先に示した神託に対する態度を踏まえている、ということである。つまり、彼女が神託についてどのように捉え、それをどのような形で上記の台詞に反映させているか、ということの理解によって、彼女の台詞の意味は大きく変わってしまうのである。こうしたことを踏まえて、以下の解釈の可能性を考えることができる。すなわち、(1) イオカステの抱く不信の念の対象はあくまで人間の神託のみであり、敬

神託をなのだ、おお異国の者よ。(992))、εἶπε γὰρ με Λοξίας ποτὲ ... (かつて、ロクシアースは私に言ったのだ..... (994))。「ピュートーの予言者の竈(を) τὴν Πυθόμαντιν ἐστίαν」という表現はこしは見られないが、「空に啼く鳥(を) τοὺς ἄνω κλάζοντας ὄρνεις」は鳥占いに関わる言葉でテイレシアースをはじめとする占い師に対する換喩表現の類であろうから、その類推から、これも同様にピュートーをはじめとする社において神託を下す予言者に対する換喩表現と見なしてよいだろう。しかるに、このように「予言者が神託を下した」という意味の言及に対して、残りの台詞は、オイディプス自身のものも含めて「神アポッローンが言った」という表現の形で言い換えられているのであり、しかも、イオカステの言う「神の神託」は少なくとも台詞それ自体は「予言者の神託」と、また「このこと」は「人間がもたらした神託があてにならないこと」と言い換えが可能である。

^{*17} 実際には、「アポッローンが言い誤った」事実を以て諭した、ということをやイオカステが意に介しているかどうかで、ニュアンスは微妙に異なってくる。cf. p. 12.

神の念は堅持されており、彼女はその使い分けを注意深く行っている（つもりであるが、観衆／読者には不信の念が神にまで及んでいるように聞こえる）、(2) イオカステーは神託の問題について人間も神も区別しておらず、敬神の念は何かあれば簡単に揺らぐほどに脆弱なものであり、縋ることもあれば手のひらを返すように拒絶することもある、(3) イオカステーは、神託の問題について人間も神も区別しておらず、最初から不信の念の対象は神にまで及ぶものであったが、それを押し隠して人間神託の問題に限定しているかのように装っている、の三つである^{*18}。

これらについて 911-923 に沿って説明を試みるならば、以下のよ

^{*18} 論理的には、第三エペイソディオンの冒頭の嘆願のイオカステーの思考について、対象が人間の神託に止まるのか神にまで及ぶのか、対象について肯定的なのか否定的なのか、その感情をコロスに対して隠しているのか隠していないのか、という三つの選択肢をそれぞれ組み合わせることで、以下の八通りを考えることができる。すなわち、イオカステーは、(a) 人間の神託のみ肯定しているが、その感情を隠している、(b) 人間の神託のみ肯定しているが、その感情を隠していない、(c) 神託のみならず神をも肯定しているが、その感情を隠している、(d) 神託のみならず神をも肯定しているが、その感情を隠していない、(e) 人間の神託のみ否定しているが、その感情を隠している、(f) 人間の神託のみ否定しているが、その感情を隠していない、(g) 神託のみならず神をも否定しているが、その感情を隠している、(h) 神託のみならず神をも否定しているが、その感情を隠していない。この内 (a)、(b) については、本悲劇において人間の神託を認めるということはすなわち神の存在および権能を認めることでもあるので、それぞれ (c)、(d) と同じことを表していると考えます。(e) については、707-725、848-858 の言動から、神託にのみ向けられた不信の念を神への嘆願によって隠している、とは明らかに解釈され得ず、また (h) については、911-923 の言動から、神託のみならず神をも否定していることを隠すことなく述べている、とは明らかに解釈され得ないので考慮しない。(c) は川島、(d) は先のエペイソディオンの不信の念を顕わにしたにも関わらず今では手のひらを返して縋っているという意味で (2) Knox ら、(f) は (1) Jebb、(g) は (3) に相当する。(c) は、イオカステーが真実に気付く時点をオイディプスの三叉路の物語が語られている間 (771-833) に想定する、という点において特殊な議論であるが、イオカステーがどの時点で真実に気付いたか、ということについてテキスト上明示されていないことは事実であり、十分な根拠を以て否定し難い(川島重成、『オイディプス王を読む』(講談社学術文庫 1996) 124)。ここでは通説の 1025ff. に従い採り上げないが、cf. p. 20. n. 23.

うになるであろう。すなわち、(1)の解釈では、第二エペイソディオンの二回にわたる説得の試みにおいてイオカステの言い方が οὐκ ἐρώ / Φοίβου γ' ἀπ' αὐτοῦ, τῶν δ' ὑπηρετῶν ἄπο (711-712) から Λοξίας / διεῖπε (853-854) へと表現が変わったのは、単に同じこと (i. e. 「ロクシアースに仕えている者」) が圧縮された言い方 (i. e. 「ロクシアース」) に置き換えられたからに過ぎず、彼女の思考においてもこれらは置き換えが成立するものとして扱われており (つまり、一貫して「ロクシアースに仕えている者」が意図されており)、ゆえに、第三エペイソディオンにおける嘆願において、彼女は、彼女の敬神の立場から、自らの考えを全く隠すことなく発言している、ということになる。ただし、このとき、彼女の立場から彼女が自覚している限りにおける彼女自身の言動が、それにも関わらず、観衆／読者には別の意味に聞こえ得る、ということに注意しなくてはならない。この解釈は、観衆／読者に対する効果という問題を除けば、およそ Jebb の主張に沿ったものである。(2)の解釈では、711-712 と 853-854 の言い方の変化は彼女の考え方の変化を反映しており、つまり、彼女は、オイディプスを論ずにあたって、神に仕えている者への不信から神そのものへの不信へと、そもそも両者には明確な区別が成されていないがゆえに自覚的にその対象を拡張しているのであるが、第三エペイソディオンの嘆願においては、まさに神に嘆願するという目的の前に、この不信の拡張が無意識的あるいは意識的になおざりにされている、ということになる。前者であれば (i. e. 無意識的になおざりにしている、つまりかつての自分の言動を忘れてしまっているのであれば) そそっかしく騒々しいイオカステ、後者であれば (i. e. 意識的になおざりにしている、つまりかつての自分の言動を覚えてはいても意に介さないのであれば) 凶々しく現金なイオカステ、ということになるが、いずれにしても敬神と不敬の間を揺れ動く彼女の人間らしい弱さが率直に現れているということができ、また Knox、Winnington-Ingram、Carey らの主張にも近く、911-923 の解釈としては現在最も広く受け

容れられているものである。(3)の解釈では、彼女の本音はそもそも853-854の神への不敬の方であって711-712は装いに過ぎず、ゆえに、第三エペイソディオンの嘆願もまた意図的な装いである、ということになる。この時、想定される装いが誰に対する装いなのか、ということ、明らかにしておかなくてはならない。神に対しての装いである、という想定は、その力をひいてはその存在を全く信じていないまさにその対象に対して信じていることを装う、という無意味な状況が引き起こされてしまうがゆえに、直ちに退けられなくてはならない。しかるに、イオカステーは、問題の台詞の冒頭で、*χώρας ἄνακτες* と呼びかけてからこの嘆願の次第を述べていることから、もし彼女が不信の念を装っていたとしたら、その装いの対象は *χώρας ἄνακτες* であり、これは、取りも直さず、第二スタシモンを歌い舞った後も舞台に残っている、コロスたるテーバイの長老たちのことを指していることになるであろう^{*19}。ゆえに、イオカステーは、傍にいるコロスたる長老たちに対して嘆願を装うことを試みているのだが、しかしながら、この時、装うことに成功しているどころかむしろ不信の念が明け透けになってしまっており、彼女のコロスに対してなされた意図は全く達成されなかった、いやむしろ、彼女は、神託はもちろん神に対しても不信の念を抱いていたその本音を、*Λοξίας διεῖπε* に引き続き、*ὧ θεῶν μαντεύματα* と叫ぶ以前に、ここでも端なくも露呈してしまった、と考えなくてはならない。ゆえに、第三エペイソディオンの彼女の言動は、無意識による錯誤の結果ということになる。このような解釈を明確に主張する研究者は管見の限り見当たらなかったが、全

^{*19} つまり、第二スタシモンにおいて表明されたコロスの不敬に対する不安に対して、イオカステーは敬神を装った、ということになる。第二スタシモンの解釈については、Winnington-Ingram, Carey の他に、cf. R. Scodel 'Hybris in the Second Stasimon of the *Oedipus Rex*' *CPh* 77 (1982) 214-223; K. Sidwell 'The argument of the second stasimon of *Oedipus Tyrannus*' *JHS* 112 (1992) 106-122; A. J. Podlecki 'The Hybris of *Oedipus*: Sophocles, *Oed. Tyr.* 873 and the Genealogy of Tyranny' *Eirene* 24 (1993) 7-30.

での可能性を考慮するために、ここに挙げた。

IV

さて、この三つのいずれを選択するかによってイオカステという登場人物の性格造形が大きく変わることになる。しかしながら、こうした選択について、単に前後関係を付き合わせる考察にのみ依拠して結論を説得的に導くことは困難であり、それはこれまでの論争が示してきた通りである。

そこで、本論では、視点を変えて、別の方法を模索したい。それは、S. の作品の傾向を踏まえ、S. が創造する特定の登場人物の性格や作品内で果たす役割を類型化し、その上で、上記三つの仮説のうち最も調和するものがどれなのかを決定する、という方法である。このような手順を踏むことによって、S. の作品の登場人物としてのイオカステの、最も相応しい言動の形を見出すことが期待される。そのためには、まず、S. の手になる他の現存悲劇から同様に機能する登場人物を探索し、それと比較考量することが必要となるが、このとき、その素材として採り上げるに最も適切なものは、イオカステ第二の説得の試みである。

Io.

ἀλλ' ὡς φανέν γε τοῦπος ᾧδ' ἐπίστασο,
 κούκ ἔστιν αὐτῷ τοῦτό γ' ἐκβαλεῖν πάλιν
 πόλις γὰρ ἤκουσ', οὐκ ἐγὼ μόνη, τάδε.
 εἰ δ' οὖν τι κάκτρεποιτο τοῦ πρόσθεν λόγου,
 οὔτοι ποτ', ᾧναξ, τόν γε Λαΐου φόνον
 φανεῖ δικαίως ὀρθόν, ὄν γε Λοξίας
 διεῖπε χρῆναι παιδὸς ἐξ ἐμοῦ θανεῖν.
 καίτοι νιν οὐ κείνός γ' ὁ δύστηνός ποτε
 κατέκταν', ἀλλ' αὐτός πάροιθεν ὤλετο.

ὥστ' οὐχὶ μαντείας γ' ἄν οὔτε τῆδ' ἐγὼ
 βλέψαιμ' ἄν οὔνεκ' οὔτε τῆδ' ἄν ὕστερον.

(848-858)

(イオカステの台詞)

しかし、少なくとも、この話はこのようであった、とご理解下さい、
 また、彼にはできません、このことを翻すなどということは、
 というのも、私だけでなく、ポリスの人々も聞いたのですから、このことを。
 しかし、たとえ、何らか、彼が前言と異なることを言いさえたとしても、
 それでも決して、王よ、ラーイオスの殺害を
 正しくその通りに示したことはないでしょう、彼について
 ロクシアースは仰ったのです、私の子の手にかかって、死ぬ定めである、と。
 それにもかかわらず、彼を、あの可哀想な子は、決して
 殺さなかったどころか、自身が既に死んでいたのです。
 それゆえ、決して、神託にかかわずらって、私は、あちらを見るつもりはないし
 こちらを見るつもりもありません、今後は。

私は、Jebb がイオカステの性格を描写するにあたって第一の説得の試み (707-725) を足がかりとして選んでしまったことが、彼の説明を不十分なものにした一つの要因であったのではないか、と考えている。なぜなら、前章で検討したように、第一の説得の試みは、確かに、イオカステの、彼女にとっての言い分を明確に示してはいる、しかし、この、「彼女にとっての言い分」は、悲劇が進行するに従って誤っていることが、そして、本当は、「彼女にとっての言い分」を越えてその後の展開を予示する第二の説得の試みの方が、彼女の本悲劇内における機能をよく現していた、ということが、明らかにされるからである (1025ff.)。

既に示したように^{*20}、Jebb は、708 に対する註釈において、およそ次のような描写を試みている、すなわち、彼女は、アポッローンへの敬神の念は揺るぎないが、子供を供犠するという大きな犠牲を払ったにもかかわらず夫を死なせることになったために、そのきっかけと

^{*20} cf. p. 4.

なった人間の予見の技術さらには予見を生業とする人間に対して深い不信の念を抱いている、と。しかし、彼は、この説明について、S.の他の悲劇作品から類型を挙げることができなかった。これに対して、第二の説得の試みにおいて示されるのは、我が子が殺されたことでその原因に対して不信の念を抱き——その原因が神託に関わる何かであることは明らかであり、しかも、一見したところ、神託を下したアポローンそのものに言及しているようにも思えるが、これについては後で論ずることにしよう——*21、知らずしてではあるが王を殺した我が子と結婚し王位を篡奪させ交わりまで持ち、そのような不法状態にあってもなおこの不信の念を表明し続け、いずれ間もなく神意により事実が全て明らかになりその結果自死に至る、ということを観衆／読者に明確に予覚させる、強烈で破滅的な母親像であり、この類型として、まず、*Ant.*におけるエウリュディケーを見出すことができるのである。

Εξ.

† ἡ δ' ὀξύθηκτος ἦδε βωμία πέριξ†

.....

λύει κελαινὰ βλέφαρα, κωκύσασα μὲν
τοῦ πρὶν θανόντος Μεγαρέως κενὸν λέχος,
αὔθις δὲ τοῦδε, λοίσθιον δὲ σοὶ κακὰς
πράξεις ἐφυμνήσασα τῷ παιδοκτόνῳ.

...

ὥς αἰτίαν γε τῶνδε κάκεινων ἔχων
πρὸς τῆς θανούσης τῆσδ' ἐπεσκήπτου μόρων.

(*Ant.* 1301-1305, 1312-1313)

(第二の使者がエウリュディケーの死を知らせる台詞)

† 怒りに駆られた、このお方が、祭壇で、そのまわりで、†

*21 cf. 第 V 章, pp. 22-25.

・ ・ ・
 瞳を開いて暗くされたのです、お嘆きになって、
 先にお亡くなりになったメガレウス様の空しい寝台を、
 そして、今度はハイモーン様の、そして最後に、あなた様に、
 悪しき運命を呪われて、子供を殺した者として。

.....

この者とかの者の死に責任がある、と、
 この亡くなられた奥様から、あなた様は非難されたのです。

エウリュディケーは、我が子ハイモーンの死に際して、先のテーバイ戦で死んだ次男メガレウスにも触れた上で、その原因をクレオンと特定した上で、その原因に対して悪しき運命を呪って自らの命を断つ。この行為は王クレオンの傲慢に対する最後の打撃となるが、まさに、これは、母親が我が子 (i. e. メガレウスとハイモーン) が殺されたことでその原因 (i. e. クレオン) に対して不信の念を表明し、その結果、自らの絶望と王に対する報復のために自死という破滅的な最期を遂げる、という意味において、イオカステの人物造形の類型になり得るものである。

同様の、さらに近似した類型を、*El.* におけるクリュタイメストラにも見出すことができる。

Κλ.

...

πατήρ γάρ, οὐδὲν ἄλλο, σοὶ πρόσχημ' αἰεί,
 ὡς ἐξ ἐμοῦ τέθνηκεν. ἐξ ἐμοῦ· καλῶς
 ἔξοιδα· τῶνδ' ἄρνησις οὐκ ἔνεστί μοι.
 ἢ γὰρ Δίκη νιν εἶλεν, οὐκ ἐγὼ μόνη,
 ἧ̄ χρῆν σ' ἀρήγειν, εἰ φρονοῦσ' ἐτύγχανες.
 ἐπεὶ πατήρ οὗτος σός, ὄν θρηνεῖς αἰεί,
 τὴν σὴν ὄμαιμον μοῦνος Ἑλλήνων ἔτλη
 θῦσαι θεοῖσιν, οὐκ ἴσον καμῶν ἐμοὶ
 λύπης, ὅτ' ἔσπειρ', ὥσπερ ἢ τίκτους' ἐγώ.

…

οὐ ταῦτ' ἀβούλου καὶ κακοῦ γνώμην πατρός;
 δοκῶ μὲν, εἰ καὶ σῆς δίχα γνώμης λέγω.
 φαίη δ' ἂν ἡ θανοῦσά γ', εἰ φωνὴν λάβοι.
 ἐγὼ μὲν οὔν οὐκ εἰμὶ τοῖς πεπραγμένοις
 δύσθυμος· εἰ δὲ σοὶ δοκῶ φρονεῖν κακῶς,
 γνώμην δικαίαν σχοῦσα τοὺς πέλας ψέγε.

(S. *El.* 525-533, 546-551)

(クリュタイメーストラーの台詞)

……

というのも、父親は、他にもない、お前のいつもの口実になっているのです、私の手によって殺された、と。私によってです、よく私は分かっています、このことについて、否定することは、私はできません、というのも、私だけでなく、正義が彼を捉えたからです、その正義に、お前は加勢をすべきでした、もし、思慮があったなら。なぜなら、この、お前がいつも嘆いているお前の父親は、お前の血を分けた姉妹を、ギリシア人のうちただ一人、神々に供犠するというのをやっていたのですから、苦しみといっても、私と同じほどのものを味わったわけではないのに、彼が子をませたとき、子を生んだ私ほどには。

……

これは、冷酷で人の道に外れた父親の考えではないかね？私にはそのように思われるのです、たとえお前の考えとは違っていようとも。死んだあの子だって言ったでしょうよ、もし声を持っていたなら。私は、それゆえ、行ったことについて、心をわずらわすつもりはありません、もしお前に私の考えが間違っているように思えるなら、正しい考えを持ってから、人を非難しなさい。

クリュタイメーストラーは、少なくとも彼女自身の立場からすれば、我が子イーフィゲネイアの人身御供について、アガ멤ノーンに負うべき責めがあるとし、王殺しによる王位篡奪と不法な結婚というかたちで彼に罪を償わせたのであり、イオカステーが神託について「今後、私は、あちらを見るつもりはないしこちらを見るつもりもありません」と言い放つように、クリュタイメーストラーもまた自身の

行為について「心をわずらわすつもりはありません」と言い放つ。これもまた、母親が我が子 (i. e. イーフィゲネイア) が殺されたことでその原因 (i. e. アガ멤ノーン) に対して不信の念を抱き、こちらは自覚して王を誅殺した者と結婚し王位を篡奪させ交わりまで持ち、そのような不法状態にあってもなおこの不信の念を表明し続け、いずれ間もなくその報復が為されるだろう、ということを観衆／読者に予覺させる、という意味において、イオカステーの人物造形の類型になり得るものである*22。

*22 稿を改めて詳細に論ずる予定であるが、両悲劇は、クリュタイメストラとイオカステーの人物造形のみならず、二人の登場人物の言動を含んだ以下の展開においても、明確な平行例となっていると考えられる。すなわち、*El.* においては、(1) 王位篡奪と不法な結婚を成し遂げたクリュタイメストラが凶夢を見た、という事実がもたらされる (410ff.)、(2) コロスによって、次のように要約されるオードが歌われる：(2-1) 夢による予兆や神託による予言は自分たちに属するものとしてあり、こうむった不法行為に対してはそれに復讐し正義または秩序を正す神が味方として自分たちの側に立ち、(2-2) 不義密通と王の暗殺という罪を犯したクリュタイメストラとアイギストスに対して応報の神罰が下されることを祈り、(2-3) 与えられた予言が成就されないなら、神託や予言などないに等しい（、しかし必ず果たされるだろう）、と宣言する、そして、最後に、(2-4) アトレウス家におけるいにしへの不法行為に言及して、以来、連綿と続いてきた不法状態を訴える (1st St., 472-515)、(3) クリュタイメストラが登場し (516)、エーレクトラーとの論争を繰り広げた後で (516-633)、アポッローンの祭壇に嘆願する (634-659)、(4) その嘆願に応えるかのように、誤った喜びをもたらす使者が登場する (660ff.)、これに対して *OT.* においては、(1) 知らずして王位篡奪と不法なしかも穢れた結婚を成し遂げたイオカステーが恐ろしい神託について言及する (707ff.)、(2) コロスによって、次のように要約されるオードが歌われる：(2-1) 言葉や行為において神を敬うことや穢れの無さが自分たちに属するものとしてあり、そのような自分たちに正義や秩序をもたらす神が自分たちの側に立ちますように、と祈り、(2-2) 「傲慢な人間」にいつか応報の神罰が下されるだろう、(2-3) 与えられた予言が成就されないなら、祭礼の歌舞など意味がなく、神託や予言を与える社にも詣でないと訴える（が、果たされるかどうかは明確にされない）、そして、最後に、(2-4) ライオスに対する古い神託が成就し（てい）ないことに言及して、以来、神事が廃れつつある現状を訴える (2nd St., 863-910)、(3) イオカステーが登場しアポッローンの祭壇に嘆願する (911-923)、(4) その嘆願に応えるかのように、誤った喜びをもたらす使者が登場する (924ff.)。舞台・登場人物・物語において互いに異なる作品であるにも関わらず、*S.* がここで全くといっていいほど同じ手さばきで悲劇を進行させていることは、否定し難い。なお、(3) アポッローンへの嘆願、(4) 使者の登

こうして、S. の他の悲劇における類型を概観することで、イオカステの劇内の機能を類推しその性格を理解する足がかりが得られた。すなわち、エウリュディケー、クリュタイメーストラの台詞から、S. において何らかの事情によって「生んだ我が子が死ぬ」ことを余儀なくされた女性は、その「何らかの事情」に対して不信の念を、それこそ国や王位に対して打撃を与え自身に対して破滅的な結末をもたらすまで、一貫して抱き続ける存在として描かれているのである。そして、この、とりわけ不信の念を一貫して抱き続ける、という性格は、事実「生んだ我が子が「死んだ」」イオカステにおいても分有されている。先に挙げた 857-858 において、彼女は、その妥協することのない性格の一端を、既に垣間見せていたのであった οὐχὶ ... οὔτε τῆδ' ἐγὼ / βλέψαιμ' ἄν ... οὔτε τῆδ' ἄν ὕστερον*²³。

ここで、本章における最初の問題に立ち戻ろう。本論は、第三エペイソディオンの嘆願において、(1) イオカステの抱く不信の念の対象はあくまで人間の神託のみであり、敬神の念は堅持されており、彼女はその使い分けを注意深く行っている（つもりであるが、観衆／読者には不信の念が神にまで及んでいるように聞こえる）、(2) イオカステは神託の問題について人間も神も区別しておらず、敬神の念は

場の箇所に対しては、*OT.* と *El.* の註釈において互いに引用されることがある (cf. Jebb, et al)。

*²³ イオカステは、設定上、ラーイオスに対して初婚で、オイディプスは初産の子、と考えられる。生まれたばかりの初子を遺棄することを余儀なくされたイオカステが、そのとき、ソークラテースが喩えた次のような振る舞いに及ぶことがあるいはあったかも知れない、ということが、アテーナイの観衆／読者の脳裏に過ぎったとして不思議はないであろう καὶ ἐὰν ἄρα σκοπούμενός τι ὧν ἄν λέγῃς ἡγήσασμαι εἰδῶλον καὶ μὴ ἀληθές, εἶτα ὑπεξαίρωμαι καὶ ἀποβάλλω, μὴ ἀγρίαινε ὥσπερ αἱ πρωτοτόκοι περὶ τὰ παιδιά. πολλοὶ γὰρ ἤδη. ... , πρὸς με οὕτω διετέθησαν, ὥστε ἀτεχνῶς δάκνειν ἔτοιμοι εἶναι, ... (Pl. *Thu.* 151c2-7)。なお、当該の台詞が「我が子が死んだ」ことを心から信じているがゆえに述べられたものである、という立場に立つ限り、イオカステが真実に気付く時点をオイディプスの三叉路の物語が語られている間 (771-833) に想定する、という川島説とは袂を分かつたなくてはならない。

何かあれば簡単に揺らぐほどに脆弱なものであり、縋ることもあれば手のひらを返すように拒絶することもある、(3) イオカステーは、神託の問題について人間も神も区別しておらず、最初から不信の念の対象は神にまで及ぶものであったが、それを押し隠して人間神託の問題に限定しているかのように装っている、という三つのいずれかを選択しなくてはならない、と論じたのであった*24。この三つのいずれかを選択することで、彼女の思考の過程において、神託だけでなく神までが意図されているかどうか、という問題について、結論を導くことができるであろう。

(2) について改めて考えてみると、第二エペイソディオオンにおけるオイディプスへの二回にわたる説得の試みにおいて神への不信を表明しておきながら、第三エペイソディオオンにおいてその事実を意識的・無意識的になおざりにして神へ嘆願を行ってしまう、などということは、何らかの事情によって「生んだ我が子が死ぬ」ことを余儀なくされたがゆえに、その「何らかの事情」に対して不信の念を、破滅的な結末を迎えるまで一貫して抱き続ける、という S. の人物造形からは、明らかにそぐわない。

(3) について改めて考えてみると、イオカステーは一貫して神に対する不信の念を抱いているもののその不信をコロスに対して隠すために嘆願を行った、ということになるが、第二エペイソディオオンでオイディプスの説得に失敗した彼女がそれでも都の穢れを祓うための方策として取らざるを得なかった行動が、よりによってコロスたる長老たちに対しての装いの祈願であった、というのは、やはり不合理というべきである。一貫して不信の念を抱いていることを隠さずそれにかかわって右往左往しない、とまで言い放った彼女に、何を今さら長老たちに対して取り繕う必要があるだろうか。

ゆえに、私は、(1) の、イオカステーのこの嘆願が、神託に動揺を

*24 cf. pp. 10-11.

隠せないオイディプスを、その神託に対して一貫して不信の念を抱いていることを示して気を静めようとしたにもかかわらず、それが奏功しなかった結果としての言動として、つまり死すべき人間としての方策が尽きた上での不死たる神への心からの嘆願として表現されている、しかしながら、彼女の言動は、観衆／読者には、神の存在を蔑ろにしたまさに不敬の念の露呈した言動と捉えられかねないものであった、と考えることが、最も彼女の人物造形に相応しいと結論付けるのである。

この、観衆／読者にとって不敬で穢れている存在に見えかねない、という事実については次の章で考察することになるが、いずれにしても、S.の創造する特定の登場人物の類型論から、彼女が一貫して不信の念を抱き続ける「何らかの事情」とは「死すべき人間たる神官がもたらす神託」であった、ということがここで推定されるのである。振り返ってみれば、この嘆願に至るまでに、イオカステーはことあるごとに神の存在を前提にしながら人間の神託の術を全否定してきた、といえる。すなわち、神は存在し神意を自ずから示すこともあるが神託は所詮人間の偽造に過ぎない(723-725)、不死なる神々の世界は存在するが死すべき人間には関わるできない(708-709, 977-979)、等々、914-918もまたそうした主張の延長線上にあるとっていい。あるいは、彼女にとって、不死の神に対する敬神の念は、死すべき人間たる神託／神官に対する不信・憎悪の裏返しですらあったのかも知れない。そのように考えると、第三エペイソディオンにおける彼女の嘆願における神を敬う「真摯な」台詞も、コリュントスの使者の報せの後の「侮蔑的な」台詞も、実は同じ感情の異なる現れに過ぎなかった、とも理解されるのである。

V

しかし、まだ、全ての疑問が解消したわけではない。848-858にお

いて、イオカステの不信の対象が、神託を下したアポッロンそのものに及んでいるように思えることが確認されており、911-923の解釈において選択された(1)という人物造形においても、神の存在を蔑ろにしたまさに不敬の念の露呈した言動と捉えられかねない側面を持っていたことも確認されている。しかも、コリユントスの使者以降のイオカステとオイディプスのやり取りを追っていくと、二人は、下された神託が人間の作り事に過ぎないのか神の意思の反映なのか、という見極めすら、もはや放棄しているようにも見える*25。

ここで、イオカステが、その登場から、王を殺し王位を篡奪し不法で穢れた結婚をしたことがやがて明らかにされることが定められた登場人物であったことを、今一度思い起こそう。イオカステは、最初の説得の試みにおいて、死すべき人間に不死なる神々の世界は関わることができないがゆえに、神託を人間の作り事にすぎない、と否定してみせるが、観衆／読者は、そのような考えが誤りで、彼女の舞台上での状況理解が極めて限定されたものであると同時に、そのような否定が神に対して不敬な言動にあたりかねないことを直ちに予覚する——そもそも、最初の説得の試みから、彼女は、自身が不敬で穢れていることを観衆／読者に示し始めていたのである。そして、三叉路での出来事を想起しかえって恐れ慄くオイディプスに、イオカステは、我が子を殺されたことを恨みに思って再び神託を否定してみせるが、この時、状況が緊迫して言葉が激して来たことの現れであろう、彼女は、「ロクシアースに仕えている者」を「ロクシアース」と圧縮して言い換えてしまう。しかし、この彼女の言い換えにおいて、むしろ、観衆／読者は、彼女の不敬で穢れた本質の露呈を見て取るのである。ここに、彼女の限定された理解と、観衆／読者の理解の落差が明確になる。

問題の嘆願において、イオカステは、彼女の意図としては、確か

*25 cf. pp. 9-10. n. 16.

に、「アポッローンよ、私たちの置かれた困難に対して最も緊密な関係があるから嘆願に参りました、死すべき人間の作り事に過ぎない神託と称されているものについて、オイディプスはあまりにも心を悩ませ我を失っています。そのようなものに心を煩わせる必要など全くない、といくら論しても聞き入れてもらえないのです、どうか、テーバイにもたらされた疫病たる穢れから解放して下さいますように」という意味のことを述べている。しかし、観衆／読者にとっては、それと同時に「アポッローンよ、たまたま祭壇が宮殿から近かったので嘆願に参りました、あなたからもたらされた神託は正しく下されなかったのだから、そのようなものに心を煩わせる必要など全くない、といくら論しても聞き入れてもらえないのです。神託の成就がわたしたち二人にもたらすことになる穢れを浄めて下さいますように」という意味にも聞こえ得る。彼女の人間の作り事たる神託に対する不信の念が深ければ深いほど、その裏返しに彼女の「敬神」の念が深ければ深いほど、そして、その現れとして嘆願の台詞が真摯であればあるほど、観衆／読者にとって、イオカステーが、嘆願などしたところで時既に遅くもはや穢れている事実も拭い去ることができずいづれ全てが暴露され破滅することになる、という皮肉と哀れみの綯い交ぜになった感情を強く引き起こされることになるだろう^{*26}

彼女は、彼女の敬神が日和見的で厚顔無恥だから不敬なのではな

^{*26} 同様の効果は、S. *El.* 634-659 におけるクリュタイメストラー嘆願のシーンにも、認められるべきである。彼女からすれば、自身には 516-551 で述べられたような「正義」があるのであり、ここでも、自ら正義を体現した者として、アポッローンに不吉な夢が実現することがないよう、真摯に嘆願しているつもりである。しかし、観衆／読者にとって、彼女は紛れもなく王位篡奪と不法な結婚を成し遂げた女なのであり、間もなくオレステースの誅殺によって不法が償われることを知っている。彼女の嘆願において、彼女の「彼女にとっての正義」の主張が強硬であればあるほど、観衆／読者には、彼女の手前勝手な論理が押し通されようとしている、という意味において、嘆願などしたところで時既に遅くもはや報復の運命から逃れることはできない、という、皮肉と憤慨の綯い交ぜになった感情がより強く引き起こされ、彼女の不敬な姿がより強く印象づけられるであろう。

い、神への敵意をコロスに押し隠して思ってもいない敬神の念を取り繕ってみせるから不敬なのではない、生んだ子を「殺された事実」を神意によるものと受け容れることができず、神の意向を伺いながら繰り広げられてきた人間の営為を不当にも神から切り離して限定するという、いわば「歪んだ敬神」とでもいうべきものを貫こうとしたから不敬なのである。彼女の貫こうとしている「敬神」の態度は、まさにそのゆえに、神を軽んじ蔑ろにする単なる不敬よりも遙かに重大な不敬な態度なのであった。

ゆえに、この嘆願のシーンは、このような神意についての決定的な無理解による重大な不敬の態度によって、これから神に翻弄されることになるイオカステの姿が、そう、まさにアイロニックに印象づけられる、重要なシーンなのである。

このように、観衆／読者は、彼女の言動について、彼女にとっての論理のみならず、それを越えて背景となる神話やこの後の展開までも同時に見通すことができ、しかも、劇の終盤に至るまで皮肉と哀れみの絢い交ぜになった感情を強く引き起こされるのであるから、私は、イオカステの一連の言動において、いわゆるドラマティック・アイロニーが成立している、と考えたい。

VI

最後に、改めて Jebb、Knox、Winnington-Ingram、Carey の議論について総括したい。

Jebb の主張は、台詞上「アポローンの神官による神託」と「アポローンの神託」が「神官による神託」という同じ意味を担うものとして言い換えられていることを正しく論証しており、一面においては、イオカステの言動を首尾一貫性の無さから救い得たといえる。しかし、彼は、彼女の人物造形を説明するにあたり、彼女の、悲劇内のある時点における限定された理解を直接反映した台詞に註釈の重点

を置いたことで、彼女の言動の、観衆／読者にとっては不敬で穢れているようにも取れる要素をなおざりにし、結果として、アイロニックに示されていた彼女の本来の悲劇内における機能を見落とすこととなった。これに対して、Jebb を批判する三人は、台詞上「アポローンの神官による神託」と「アポローンの神託」が言い換え可能であることの方をなおざりにし、イオカステの言動における首尾一貫性の無さをむしろ際立たせようとした。その結果、彼女の人物造形を説明するにあたり、彼女の台詞が限定された理解に基づいて発言されていることを考慮せず、結果として、やはり、アイロニックに示されていた彼女の本来の悲劇内における機能を見落とすことになった。

これらに対して、本論では、次のような知見を得た、すなわち、イオカステにはイオカステにとっての論理が存在し、それはまさに Jebb が描出したところのものなのであるが、観衆／読者は、同時にそのイオカステの言動から既知の神話の知識を想起しその後の展開を予期することで、まさに Knox、Winnington-Ingram、Carey が描出したところの彼女の不敬で穢れた本質をもまた、彼女が知らぬまま、彼女において、見ているのだ、と。彼らは、いずれも、部分的には正しく、部分的には誤っていたのである。そして、本論は、S. の作劇の傾向を踏まえて特定の登場人物における類型を考え比較考量することによって、彼らの学説を統合・止揚し新たな解釈の可能性を開こうとした。アポローンに対して敬神を貫くイオカステかそれとも日和見で厚顔無恥なイオカステか——本論は、こうした二者択一を乗り越え、子を失ったと思ひ込み、アポローンの言葉に対して愚かにも攻撃的で、そして、いくぶん哀れでもあるイオカステ像を呈示するものである*27。

*27 本稿を作成するにあたり、本紀要編集長ならびに匿名査読委員の方々から数々の貴重なご意見・ご助言を頂いた。数度にわたる大がかりな推敲に付き合ってくれたことに、心から御礼を申し上げる。無論、本稿にまだまだ見られるであろう不備は、著者の責任に帰するものである。

参考文献

- Allen, T. W. ed., *Homeri Opera Tomvs III* (Oxford 1920).
- Burnet, J. ed., *Platonis Opera Tomvs I* (Oxford 1900).
- Blaydes, F. H. M., *Sophocles Vol.1* (London 1859).
- Blaydes, F. H. M., *Sophocles Vol.2* (London 1880).
- Campbell, L. ed., *Sophocles: Plays and Fragments Vol.1* (Oxford 1876).
- Campbell, L. ed., *Sophocles: Plays and Fragments Vol.2* (Oxford 1881).
- Campbell, D. A., *Greek Lyric III, Stesichorus, Ibcyus, Simonides, and Others* (Cambridge, Massachusetts and London 1991).
- Carey, C., 'The Second Stasimon of Sophocles' *Oedipus Tyrannus*' *JHS* 106 (1986) 175-179.
- Dawe, R. D. ed., *Sophocles Oedipus Rex* (Cambridge 2006).
- Dodds, E. R., *The Greeks and The Irrational* (Berkeley and Los Angeles, 1951).
- Edmunds, L., 'The Teiresias Scene in Sophocles' *Oedipus Tyrannus*' *SyllClass* 11 (2000) 34-73.
- Ellendt, F., *Lexicon Sophoclevm* (Hildesheim 1958).
- Finglass, P. J. ed., *Sophocles, Electra* (Cambridge 2007).
- Griffith, M. ed., *Sophocles, Antigone* (Cambridge 1999).
- Hutchinson, G. O. ed., *Aeschylus, Septem contra Thebas* (Oxford 1985).
- Jebb, R. C. ed., *Sophocles: Plays; Antigone* (Cambridge 1900. Repr. London 2004).
- Jebb, R. C. ed., *Sophocles: Plays; Electra* (Cambridge 1894 Repr. London 2004).
- Jebb, R. C. ed., *Sophocles: Plays; Oedipus Tyrannus* (Cambridge 1893. Repr. London 2004).
- Kamerbeek, J. C., ed., *The Plays of Sophocles Part III, The Antigone* (Leiden 1978).

- Kamerbeek, J. C., *The Plays of Sophocles Part IV, The Oedipus Tyrannus* (Leiden 1953).
- Kamerbeek, J. C., ed., *The Plays of Sophocles Part V, The Electra* (Leiden 1974).
- Kitto, H. D. F., 'Antigone' in *Form and Meaning in Drama* (London 1956) 138-178.
- Knox, B. M. W., *Oedipus at Thebes: Sophocles' Tragic Hero and His Time* (New Heaven and London 1985).
- Liddell, H. G. and Scott, R., *A Greek-English Lexicon* (Oxford 1968).
- Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G. ed., *Sophoclea, studies on the text of sophocles* (Oxford 1990).
- Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G. ed., *Sophoclis Fabulae* (Oxford 1990).
- Page, D. L. ed., *Lyrice Graeca Selecta* (Oxford 1968).
- Page, D. L. ed., *Aeschyli Septem Quae Supersunt Tragoedias* (Oxford 1972).
- Podlecki, A. J., 'The Hybris of Oedipus: Sophocles, *Oed. Tyr.* 873 and the Genealogy of Tyranny' *Eirene* 24 (1993) 7-30.
- Rutherford, R. B., 'The irony of Greek tragedy' in *Greek Tragic Style* (Cambridge 2012) 323-364.
- Scodel, R. 'Hybris in the Second Stasimon of the *Oedipus Rex*' *CPh* 77 (1982) 214-223.
- Sidwell, K., 'The argument of the second stasimon of *Oedipus Tyrannus*' *JHS* 112 (1992) 106-122.
- Wilamowitz-Moellendorff, T., von, *Die dramatische Technik des Sophocles* (Berlin 1917).
- Winnington-Ingram, R. P., *Sophocles: An Interpretation* (Cambridge 1980).
- 川島重成, 『オイディプース王を読む』(講談社学術文庫 1996).
- 桜井万里子, 『古代ギリシアの女たち』(中公新書 1992).